何のために働くべきか

ヨハネ福音書6:22-27
【新改訳2017】

6:22 その翌日、湖の向こう岸にとどまっていた群衆は、前にはそこに小舟が一艘しかなく、その舟にイエスは弟子たちと一緒には乗らずに、弟子たちが自分たちだけで立ち去ったことに気づいた。
6:23 すると、主が感謝をささげて人々がパンを食べた場所の近くに、ティベリアから小舟が数艘やって来た。
6:24 群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないことを知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り込んで、イエスを捜しにカペナウムに向かった。
6:25 そして、湖の反対側でイエスを見つけると、彼らはイエスに言った。「先生、いつここにおいでになったのですか。」
6:26 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。
6:27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。この人の子に、神である父が証印を押されたのです。」

【祈りながら考えよう】

（１）群衆がイエスを捜してカペナウムに来たのは何のためですか。
（２）「なくなってしまう食べ物のために働く」とはどういうことですか。
（３）「永遠のいのちに至る食べ物のために働く」とはどういうことですか。

【解　説】

（１）イエスが弟子たちと一緒ではなかったことを知っていた

《その翌日、湖の向こう岸にとどまっていた群衆は、前にはそこに小舟が一艘しかなく、その舟にイエスは弟子たちと一緒には乗らずに、弟子たちが自分たちだけで立ち去ったことに気づいた》（22節）

五千人が養われた日の「翌日」である。「湖の向こう岸にとどまっていた群衆」とは、湖の北東岸で、主が食べさせ、解散させる前、弟子たちが舟に乗り込んだ時に、岸の近くに残っていた群衆か、そのうちのある者たちのことである。

マタイとマルコ福音書は共に、主が、まず弟子たちを舟に乗り込ませてから、群衆を解散させ、そして、祈るために山へ退かれた、と述べている。彼らは弟子たちが、その前の日の夕刻、小舟に乗り込むところを見ていた。

そしてイエスが弟子たちと一緒ではなかったことも知っていた。その時には、舟は１隻しかなく、それに弟子たちが乗ったのだった。

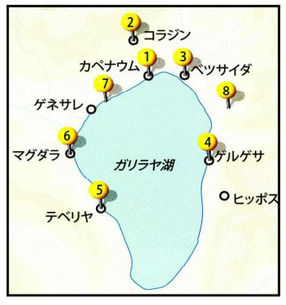
（２）イエスを捜しにカペナウムに向かった

《すると、主が感謝をささげて人々がパンを食べた場所の近くに、ティベリアから小舟が数艘やって来た。群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないことを知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り込んで、イエスを捜しにカペナウムに向かった》（23-24節）

主が奇蹟的に養われた岸の近くに残っていた群衆はイエスの行動を注意深く見守っていた。イエスが祈るために山に登られたことを彼らは知っていた。

彼らはまた、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗って湖を渡って行ったのではないことも知っていた。それなのに、翌日、イエスの姿はどこにもなかった。

彼らは湖を渡ってカペナウムに行ってみることにした。おそらく弟子たちはそこにいるだろう、と思われたからである。



地点⑧からカペナウムに向かう

彼らにはイエスがどうやってカペナウムに行くことができるか理解できなかったが、とにかく行って、イエスを捜してみようということになった。

（３）わたしを捜しているのはパンを食べて満腹したから

《そして、湖の反対側でイエスを見つけると、彼らはイエスに言った。
「先生、いつここにおいでになったのですか。」イエスは彼らに答えられた。
「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです》（25-26節）

カペナウムに到着してみると、そこにイエスがおられた。彼らは好奇心を隠せず、「先生、いつここにおいでになったのですか」と尋ねた。この質問は、明らかに、主を見つけたことの驚きと、主が弟子たちと一緒に舟に乗られたのでないのであれば、どのようにしてカペナウムにおいでになることができたのかを、理解できないことを示している。

主は彼らに答えられた。「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです」主は人の心の中までも見通される。私たちが他の人に知られたくないと思っていることでも、主はすべて見通しておられる。それでは、彼らが考えていたのは、何だったのか。彼らは、ガリラヤ湖を渡って、主に付いて来たから、彼らは主を信じ、付いて来ているように見えた。しかし、そうではなかった。

彼らは、主がなさった奇蹟を見て、信じ、付いて来たのではなかった。奇蹟を見て信じる信仰は、決して本当の信仰とは言えないが、それでも信仰がないよりはまだましである。

しかし、主は彼らが主に付いて来た動機が、そうしたものではないことを見抜いておられた。それでは、彼らの動機は何だったのか。「パンを食べて満腹した」ところにあった。

私たちが教会の集会に来た動機は何か。なぜ礼拝に来たのか。主は私たちの心の中の本当の気持ちを読み取っておられる。人の目に隠されていることも、主の御目に隠されていることはできない。だから、主の御前にごまかすことなく、正直でありたい。

（４）永遠のいのちに至る食物のために働きなさい

そこで、主はご自分に付いて来た群衆にこう言われた。

《なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい》（27節a）

①労働を禁じておられるのではない

私たちがどんなにこの世において働き、そのことによって良い生活を送ることができたとしても、所詮それだけのこと。私たちもやがて死に、この世も過ぎ去ってしまう。そんなことのために、自分の精力を全部使ってよいのかと、主は問うておられる。

主が労働を禁じておられるのでない。働かないことを奨めておられるのではない。働くことは、神が最初の人アダムに与えられた人間の務めであるから、働くことが否定されているのではない。

要は、何を第１の目的として働いているかということである。過ぎゆくものが、あたかも究極的な永遠の事柄でもあるかのように思う「霊的盲目」を、主は指摘しておられる。

私たち人間は働く者として造られた。だから、働かないでいる時に、生きがいを感じることはない。しかし、問題は何のために働くかである。人間は肉体だけではなく、霊も魂もある存在である。魂がないがしろにされているのに、体のためにだけ働くことに、心が向かい過ぎてはならない。

②「命令されていること」

私たちは永遠のいのちが与えられたが、その永遠のいのちが養われ、成長し、悪魔の攻撃からその尊いいのちを守るため、あらゆる努力をしなければならない。私たちはどのように働くべきか。

私たちは、「指定されたすべての手段」を用いて働かなくてはならない。隠された財宝を発掘する人々のように、「聖書」を読まなくてはならない。いのちを賭けて危険な敵と戦う人々のように、真剣に「祈り」に取り組まなくてはならない。

また、私たちの心のすべてを神の家に携えていって、礼拝し、遺言の朗読に耳を傾ける人のように、聞かなくてはならない。日々、肉とこの世と悪魔と戦わなくてはならない。これが「働くこと」である。

毎朝、他の人よりも早く起き、少なくとも30分間、聖書を読み、祈るには、大きな犠牲と戦いがある。学校や職場へ遅刻しないように努力しながら、霊的いのちのためにはほとんど努力らしい努力をしない人を、主はご覧になって、どんなに心を痛めておられることか。

「働きなさい」とは、ギリシャ語では、エルガゼッセという言葉である。「それを得るために熱心に努力しなさい」という意味である。悪魔は、主から与えられた永遠のいのちが成長しないように、あらゆる形で妨害してくる。

与えられた永遠のいのちが養われ、生き生きとするためには、その栄養分が必要である。それは、主が与えてくださる。主が「それは、人の子が与える食べ物です」と言われた通りである。

私たちの心の中までも見通しておられ、私たちに何が１番重要で、必要なものであるかということを知っておられるのは、主であられる。その主が言われるのであるから、私たちは従わなければならない。